もようを作ったりしましたが、次はここ、その次はここと、私どもがいうとおり、子どもたちはまねをするだけでした。

「便所があぶないため、子どもが無事に用をたしてもどってくるか、ハラハラしていました。」

「おもちゃらしいおもちゃもなく、一本の棒切れやなわの切れはしが、遊び道具となりました。」

こんなようすから、そのころのリンの幼稚園に対してのひたむきな情熱がうかがえるようです。

今の幼稚園のような遊び道具や、ととのったいろいろな施設はありませんでしたが、リンは、朝や帰りのあいさつ、両親へのあいさつなどは、きちんと教えました。特に、生活のけじめ（礼儀作法）は、幼い子どもにもきびしくしつけました。そのため、幼稚園に行っている子どもは、むだづかいが少なくなり、